

---

# ファイブ・カラーズ

魔王P

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファイブ・カラース

### 【Nコード】

N5147V

### 【作者名】

魔王P

### 【あらすじ】

この世には沢山の『ゲーム』が存在する。

『野球』 『サッカー』 『卓球』 etc・・・、それらほとんどが『相手』無しには始まらない。

『カードゲーム』もまた然り、相手がいてこそ本当の『ゲーム』となり得るのだ。

創造的カードゲーム『ファイブ・カラース』、キミと一緒に、ミックス・ザ・カラー!!!

## イントロダクション『ファイブ・カラーズ』（前書き）

自分の思う理想のカードゲームを文章で形にしてみました。

この説話はルール紹介とプロローグを兼ねていますので、これから書いていく続きとは表現に差が出る可能性があります。

質問、アドバイス、誤字脱字報告などありましたら、ぜひ感想に書いていただけるとありがたいです。

## イントロダクション『ファイブ・カラーズ』

### 西条高校二階C教室

四時限目終了のチャイムが響き、教室に昼休みの活気が訪れる。

生徒各々が好きにグループをつくり食事をはじめたり、食堂に出掛けてゆくなか、一人の青年が微動だにせず机に突っ伏している。

「あつかさかくーん、遊びに来たよー！」

教室の後ろのドアが開き、能天気な声が響く。

寝ていた青年の肩がピクリと動き、のっそりと青年が顔を上げ後ろのドアの方を見やる。

「人が寝てんだから静かに入ってこい、テントウムシ」

「だーから！テントウムシじゃなくて七星だって！ナ・ナ・ホ・シー！ー！」

テントウムシと呼ばれた男、ナナホシヨウスケ七星陽介が教室の中に入り、青年に走り寄る。

「まったく、赤坂くんでは人の名前が憶えられないんだからー」

七星が青年の顔を覗き込むようにしながら、唇を尖らせる。

「……………キモいぞ」

「冷静にキモいって言われた！昼食時なのに超ショック！」

「んで、何の用だ？テントウムシ」

教室が七星の寒いギャグで静まり返るなか、完全に無視して赤坂が尋ねる。

「あ！そうだった、へへへっこれ見てくれよ！」

自分の学ランの内ポケットをあさり、一枚のカードを突き出す。

「『太陽戦機ソーラレイ』、何だコレ？」

「ふっふっふ、何を隠そう俺ってば今流行りのカードゲーム『ファイブ・カラース』のプレイヤーなんだよねー、ソレは昨日当たったレアカードなんだぜ！」

「・・・自慢しに來ただけなのかよ・・・」

赤坂は白い枠に金の意匠が施されたカードをしげしげと見つめながら呆れる。

「ねーねー、赤坂くんも『カラース』やろうよー」

「これカード集めて戦う奴だろ、餓鬼臭えーしやらねーよ」

「餓鬼臭い！？何も判ってないみたいだね、赤坂くんは」

顔の前で指を振りながら、七星が続ける。

「『カラーズ』は戦略性、楽しさ、共にそんじょそこらの奴とは別物なんだよ、ルールを教えるから見ててくれよ」

「いって、やらねーから」

赤坂は至極面倒そうに七星を止めようとするが、聞こえていないかの様に七星が説明をはじめめる。

「まず、このゲームは『メインデッキ』45枚と『シンボル』3枚のあわせて48枚構成なんだ、『メインデッキ』には『シンボルカード』以外をどんな配分でも大丈夫だけど、『シンボル』には『シンボルカード』が3枚絶対に必要なんだ。」

「カードは『シンボルカード』『ユニットカード』『スペルカード』『リアクトカード』『エリアカード』の5種類あって、それぞれ白、緑、青、赤、黄の色が割り当てられてるんだよ。」

「じゃあ、テントウムシが昨日当てたカードは『シンボルカード』ってことだな」

「そう！『シンボルカード』はこのゲームの要、プレイヤーのライフ且つ切り札的存在なんだよ」

「それじゃまずは各カードの説明をしていくと・・・」

七星が学ランのポケットから自分のデッキを取り出し、説明を続けようとしたところで、教室の前のドアが強く開かれる。

腕に『風紀委員』と力強く書かれた腕章を着け、背中にカーボン製の竹刀を背負った黒髪の女生徒が教室に歩み入り、教室が途端に騒がしくなる。

小東夜子、生徒達から「校則の暴君」と呼ばれる彼女の『パトロール』は全くの予断を許さず、今まで摘発してきた違法品は200を越えると言われており、一説には学校の風紀の為に創られたアンドロイドなのではないかとまで憶測の飛び交う、そんな彼女が、其処にいた。

「オイ！ゲーム機隠せ！」とか「雑誌隠せ！」と慌てる生徒達の背中に、通りざまに 要出頭 と書かれた赤い紙を張りつけながら、赤坂のいる机に近づいてゆく。

「ヤバツ、小東先輩だ、赤坂君また後でね！」

七星が脱兎の如く教室の後ろから逃げ出そうとするが、学ランの首元を夜子に掴まれ、クレーンゲームの景品の如く赤坂の机に引き戻される。

「所持禁止物の持ち込み、及び使用について話をきかせてもらおうかな、七星陽介君……それから赤坂光輝君も」

夜子が赤坂の方に顔を向け、端正な顔をニヒルに歪ませる。

「テントウムシが一人で暴れてただけっすよ、先輩」

「疑わしきは拷問が私の信条でね、君も取り調べ対象さ」

「とんでもねー信条っすね、嫌っすよまだメシ食ってねーし」

「取り調べ室で食べたまえ」

「トイレいきてーし」

「取り調べ室で済ませたまえ」

「イヤ、どんなプレイだよ」

「赤坂くーん、先輩と二人は怖いよー、一緒に逝こう、ね？」

「ここは俺に任せてお前だけ逝け」

「冷たっ!?!」

「ふざけてないで早く来たまえ、赤坂君」

「……………判りましたよ、先輩の気が済むってんなら……………」

「ククク、分かればいいのさ」

七星を引きずったまま、夜子が教室から出て行き、その後ろ赤坂が面倒そうについていくという珍妙な画に生徒達がざわめく。

「なんで、あいつらだけ？」

誰かがポツリと呟いた。

「取り調べ室って言ってませんでしたっけー？ここ空き部室ですよー、せんばーい」

階段を登る間も夜子に引きずられ、ズボンが埃まみれになりながら、七星が尋ねる。

「まあ、入りたまえ、話はそれからだ」

「………何すか、ここ？」

ドアを開けた赤坂の目に飛びこんできたのは、大型の冷蔵庫だった。見渡してみれば、他にもカセットコンロや電子レンジ、さらには液晶テレビにソファァー、と家のリビングを切り取って張りつけたかのような光景が広がっていた。

「先輩、学校に住むのはどうかと思うっすよ」

「住んではいない、ただ個人所有しているだけさ、校則には『空き部室を勝手に所有してはいけない』という項目はないからね」

「いやそりゃ誰もやらねーからだろ、普通に考えて！」

「ククっ、そう褒めないでくれ、照れるじゃないか」

「全っ然褒めてないっすよ！？むしろ呆れてすらいますけど、何か

!？」

「大変だよ赤坂くん！」

何時の間にか部室の奥に入り込んでいた七星が叫ぶ。

「このテレビ、W W W映るよ！」

「知らねーよ！つか隠せてねーよ!？」

「ちなみに、デイ ニーチャンネルも映るぞ」

「どうでもいいっすよ！つか、取り調べするんじゃないんすか？」

「ああ、それは嘘だ」

天井に届きそうな程に大きな冷蔵庫を漁りながら、夜子がさらりと答える。

「じゃあ何の為に連れてこられたんすか、俺ら」

開けられた冷蔵庫の扉越しに、赤坂が尋ねる。

「キミと七星君は『クリエイター』なのだろう？ほら、これを飲みたまえ」

「『クリエイター』？知らねっすよそんなモノ、何の飲み物すかれ（水筒？）」

「先程、七星君と話していただろう？水筒の中身は『カレー』だ」  
水筒を傾け、中身を口に流し込んでいた赤坂が噎せ返る。

「ブフツ！、何飲ましてくれてんすか！？」

「おかしいな、『カレーは飲み物』と聞いていたんだが……」  
「？」

「それは一部の人間だけっすよ！『クリエイター』って何なんすか？」

「『ファイブカラーズ』をやってる人を『クリエイター』って言うんだよ、赤坂くん」

今までテレビを見ていた七星が、何時の間にか赤坂の後ろに立っていた。

「小東先輩、赤坂くんは今日『カラーズ』を始めたばかりの初心者なんですよー」

「いや、始めてすらいねーよ」

「なるほど、ならば丁度良い、今この場で説明してあげようじゃないか」

「あ、もしかして先輩も『クリエイター』なんですか？」

「その通りだ、相手がいなくて暇をしていた時にキミ達を見掛けてね、ここで一勝負やってもらおうかと思っただんだ」

夜子が折たたみ式の机をロッカーから取り出し、組み立て始める。

「いちいち口で全部説明しても判りにくい、実際のプレイングを通じて見てもらった方がいいと思うのだが、どうかな七星君？」

「わっかりましたー、じゃあ赤坂くん、俺のすごいクリエイトテク見せてあげるね！」

部室の中央付近に出来上がった、授業机二つ分程の折たたみ机の片側に、七星が立つ。

「……………一応聞いてーんだけど、帰ったら駄目か？（腹へつた……………）」

「「駄目」「

……………りよーかい」

夜子も机の前に立ち、二人の準備が整う。

お互い手元に山札と3枚の白色のカードを置いてゆく。

「さて、それじゃあ……………」

「「ミックス・ザ・カラー!!」」

「先攻はこの私から行かせてもらうよ、レディファーストという奴だ」

「自分で言うてどうするんすか、先輩……………」

夜子が手元のデッキから1枚カードを引き、ゲームが始まる。

「まずはフェイズの説明だ、お互いのプレイヤーはデッキからカードを1枚引いてターンを始める、『ターン開始後ドロウする』のではないから注意したまえ」

「ターン開始後のフェイズは『アレンジフェイズ』、『クリエイト』、『スペルカードの使用』が行なえる期間だ、今からやってみせる」

夜子は手札から緑色のカードを取り出し、表向きで自フィールド上に置く

「赤坂君、このカードは何か判るかね？」

「緑色だから・・・『ユニットカード』っすか」

「正解だ、『ユニット』を場に出す行為を『クリエイト』と言い、1ターンに一度だけ可能だ、『見習い騎士アンネ』をクリエイト」

『見習い騎士アンネ』 2000

「更に私は手札から『花壇騎士団の紋章』カードを発動、効果でデッキから【セイント】且つ【ナイト】ユニットを加えさせてもらう、『聖騎士アイリス』を手札に加える」

夜子が手札の青色のカードを七星に見せ、お互いのフィールドの間に置く。

「今のは青っすから、『スペルカード』すね」

「ああ、『スペルカード』は使用后『エレメントゾーン』に送るんだ、このゲームの最大の特徴は、『自分の墓地にあたる場所』が無

く、『共通の墓地』にあたる『エレメントゾーン』しかないことなのだよ」

「何か意味あるんすか、それ」

「じきに判るさ、先攻1ターン目は『バトルフェイズ』が存在しない、このまま『エンドフェイズ』、ターンエンドだ」

「よし、俺のターンだ！『電々虫』をクリエイト！」

『電々虫』 1000

「俺のターンからは攻撃出来るんだ、『腐妖土』を発動だ！」

七星が自分のユニットの後ろに黄色のカードを置く。

「黄色・・・『エリアカード』って奴だな」

「大正解だよ赤坂くん！『エリアカード』は『スペルカード』と違って、使用後もこうやって場に残り、『エレメントゾーン』には行かないんだ、『バトルフェイズ』、『電々虫』で小東先輩のユニットに攻撃！」

「攻撃宣言は各ユニット一回ずつ、相手と自分の攻撃力を比べて、少ないほうがブレイクされて『エレメントゾーン』に送られるんだよ、赤坂君」

「じゃあ、テントウムシのユニットが負けるだけじゃねーの？」

戦闘に負けた『電々虫』がエレメントゾーンに送られる。

「いやいや、これも俺の作戦の内さ、【インセクター】ユニットが破壊された時に、『腐妖土』の効果発動！、1ターンに一度だけ、自分のデッキから破壊されたユニットより攻撃力の低い【インセクター】ユニットをアナザークリエイト出来る！現われる『眠眠蝉』！」

『眠眠蝉』 500

「おいおい、『クリエイト』は一回じゃなかったのかよ？」

「確かに『クリエイト』は一回しか出来ないけど、カードの効果での『アナザークリエイト』は何度でも出来るんだよ赤坂くん」

『見習い騎士アンネ』がブレイクされる。

「え？そのユニットはなんで倒されたんだ？」

「さっきのブレイクされたユニット、『電々虫』の効果だよ、このユニットをブレイクした相手ユニットを破壊する、っていう」

「『破壊』と『ブレイク』では何が違うんだ？」

「『破壊』は戦闘、もしくはカードの効果で『エレメントゾーン』に送ること、『ブレイク』は戦闘でしか発生しないのだよ、私のユニットが『破壊』された時、『ジャステイス・オーダー』を発動する！」

夜子が手札から赤色のカードを発動する。

「赤色は『リアクトカード』って奴だな、『ユニット』が緑、『スペル』が青、『リアクト』が赤、『エリア』が黄、そして『シンボル』が白……だよな」

「なかなか飲み込みが早いようだね、『リアクトカード』は相手の特定の行為に対し発動出来るカードで、使用後は『スペル』と同じ『エレメントゾーン』行きだ、『ジャステイス・オーダー』の効果でデッキから【セイント】且つ【ナイト】ユニットをアナザークリエイトする、『聖騎士プリコット』！」

『聖騎士プリコット』 1500

「俺のユニットはもう攻撃しないから、ターンエンドです」

「私のターン、『聖騎士プリコット』の効果が発動する、自身をエレメントゾーンに送り、デッキから『聖騎士プリコット』以外の【セイント】且つ【ナイト】ユニットをアナザークリエイトする、来い『見習い騎士アンネ』！」

『見習い騎士アンネ』 2000

「ユニットの効果は何時でも使えるんすか、先輩」

「そうでもないさ、大まかに分ければ『アレンジフェイズに発動』と『バトルフェイズに発動』になり、私の『聖騎士プリコット』は前者に分類されるな」

「さて、エレメントゾーンを見てみたまえ、赤坂君」

「えーと、緑3枚、青1枚、赤1枚の4枚っすね」

「『カラーズ』の醍醐味、『リアライズ』を見せてあげよう、ファーストシンボル『薔薇姫アンネ・ローゼ』をリアライズ！」

『薔薇姫アンネ・ローゼ』 4000(3/3)

夜子はデッキ横の三枚重なっている白いカードの一枚を場に置く。

「白いカード・・・これが『シンボル』すか、こんだけ強いなら最初から出せば良かったんじゃないんすか？」

「このカードの名前の下の表記を見たまえ、『G3B1R1Y0W0』、これは『G(緑)のユニット』が3枚、『B(青)のスペル』が1枚、『R(赤)のリアクト』が1枚、『Y(黄)のエリア』及び『W(白)のシンボル』は0枚、エレメントゾーンに揃っていないければ『リアライズ』出来ないということさ」

「それじゃあ、大量にカードをエレメントに置けば、もっと強いシンボルも出せるんすか？」

「シンボルカード重なった3枚の上から順番にしか出せない、一度に自分の手札を使いすぎると・・・」

「・・・エレメントゾーンは共通すから、カードをエレメントゾーンに送るのは相手にも得がある、そういうことですか？」

「Exactry(その通りだ)！このゲームのミソは『エレメントゾーンのコントロール』にあるという事さ、手札から『聖騎士アイリス』をクリエイト！効果で自フィールドに【セイント】且つ【ナイト】ユニットが3体以上存在する限り、自分の攻撃力を+10

00！」

『聖騎士アイリス』 2500 (1500)

「バトルに入る！まずは『見習い騎士アンネ』で『眠眠蝉』を攻撃  
！」

『眠眠蝉』がブレイクされエレメントに送られる。

「【インセクター】のブレイク時に『腐妖土』発動！デッキから『  
甲虫ワーム・オー』をアナザークリエイト！」

『甲虫ワーム・オー』 0

「『聖騎士アイリス』でその弱小虫を攻撃だ！」

「虫だからって舐めてると痛い目みますよ、小東せんぱい、『甲虫  
ワーム・オー』の効果、ブレイクされた時にデッキから『甲虫』と  
名の付くユニットを手札に加えられる、『甲虫スカイホッパー』を  
手札に加えます」

「相手のユニットは全て消えた、『薔薇姫アンネ・ローゼ』で攻撃  
だ！ローゼス・ストリーム！」

守る者のいなくなった七星のシンボルに、攻撃が加えられる。

「ユニットいない状況で攻撃受けたらどうなるんすか、先輩」

「シンボルトップのユニットに、『ダメージカウント』が1ポイン  
ト追加されるんだ、『ダメージカウント』が3ポイント蓄積したシ

ンボルは破壊されるし、リアライズ後もカウントは残り続ける、そして自身の3枚のシンボルが破壊されれば……」

「シンボルが0枚で負けつて事すね」

「その通り、もちろん破壊されたシンボルはエレメント行きだ、ターンエンド」

「やっと俺のターンが回ってきた！いくよ、ファーストシンボル『魔甲虫タンゴール』をリアライズ！更に『甲虫スカイホッパー』をクリエイト！」

『魔甲虫タンゴール』 4000 (2/3)

『甲虫スカイホッパー』 2000

「『魔甲虫タンゴール』の効果で、自ターンのみ攻撃力を+1000！更に手札からスペル『アーマード・ブレイク！』を発動、フィールドの『甲虫』と名のつくユニットを破壊し、相手のユニット一体を破壊します！『見習い騎士アンネ』を破壊、更に『腐妖土』を発動し『電々虫』をクリエイト！」

『魔甲虫タンゴール』 5000 (4000) (2/3)

『電々虫』 1000

「くつ、『聖騎士アイリス』の攻撃力は1500にダウン、やっつけてくれるじゃないか！」

「この勢いのまま！バトル、『電々虫』で『聖騎士アイリス』を攻撃！」

「『電々虫』の効果で破壊する気が、ククク、なら私も『薔薇姫アンネ・ローゼ』の効果発動！相手はこのシンボルしか攻撃対象に選べない！」

攻撃対象が強制的に変更され、『電々虫』がブレイクされる。

「くそつ、『電々虫』の効果はユニットに対してのみ、シンボルには対応出来ない・・・、やってくれますね！じゃあ『魔甲虫ダンゴール』で『薔薇姫アンネ・ローゼ』を攻撃！」

『薔薇姫アンネ・ローゼ』（2/3）

「ダメージは追い付いた、ターンエンド！」

「久々に熱くなってきたよ・・・脱ぎたい位にね」

「変態っすか、先輩」

「私のターン！・・・と言いたいところだが、残念ながら午後  
の授業まであと7分だ」

「あ、ホントだ」

腕時計を確認しながら、嘆息ぎみに夜子がデッキを片付け始める。

「このままというのも区切りが悪い、そうだな・・・放課後にまたここで続きといかないか？」

「わかりましたー！・・・赤坂くんも来るよね？」

「いや、俺は帰りて」キミは強制参加だ」・・・まじすか」

「ここで知り合ったのも何かの縁だ、キミが『カラーズ』の楽しさに夢中になるまで、私が洗脳（せん脳）してやろうと決めたんだね」

新たなクリエイター誕生は、そう遠い日の事ではない。

## イントロダクション『ファイブ・カライズ』（後書き）

自分は人の目に付く文章は読書感想文とレポート位しか書いたことがございませので、表現としておかしな場所などありましたら、教えていただけると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5147v/>

---

ファイブ・カラース

2011年10月8日22時03分発行